

## 香取遺産

◀ ①平成25年の葺き直し、  
②作業風景、③檜皮の束



vol.168

## 香取神宮の 檜皮葺屋根

市内には30棟を超える文化財建築がありますが、その屋根にはさまざまな種類を見ることができます。

屋根の葺き方は、瓦葺、茅葺あるいは銅板葺などが一般的に知られていますが、珍しいところで檜皮葺の屋根があります。檜の樹皮を利用したもので、油分を多く含むため雨による浸食に強く、古くから社殿など格式のある建築に使われてきました。全国の国宝・重要文化財などの建築の多くにこの檜皮葺が残されていて、香取神宮の本殿もその一つです。

薄い檜皮を用いることで優美な曲線を表現できる一方、植物系の素材のため、やや耐久性に劣ることから、30年ほどの周期での葺き直しが適当とされています。神宮本殿は、近年では昭和52年、平成25年に葺き直しを行っています。

その葺き方は、平葺箇所では、幅12〜15cm×長さ75cmのサイズに揃えた檜皮を、1・2cmずつずらして葺き重ね、竹釘で留めます。平葺用の竹釘は3・6cmの寸法で、職人はこの竹釘をたくさん口に含み、一本ずつ取り出しながらテンポ良く檜皮に打ち付けていきます。

軒先を見ると、重ね幅が広く重厚感がありますが、これは軒積みといって特に厚く重ねて葺いたもので、屋根全体の厚みではありません。

記録によれば、神宮本殿の屋根は慶長12（1607）年の造営までは檜皮葺でしたが、その後破損したため柿葺（板葺の一種）となり、最後の造営となった元禄13（1700）年にも、柿葺（栩葺とも）のまま造り替えられました。昭和15年に社殿などの大改修が行われ、その際に本殿の屋根は檜皮葺に改められ現在に至っています。